



Title	現代日本語における時間を表す複文の構文文法的研究 －日本語文法研究の通言語的基盤を求めて－
Author(s)	松浦, 幸祐
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88128">https://doi.org/10.18910/88128</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 松 浦 幸 祐 )

## 論文題名

現代日本語における時間を表す複文の構文文法的研究  
—日本語文法研究の通言語的基盤を求めて—

## 論文内容の要旨

本稿は、Croft による言語類型論的構文文法である Radical Construction Grammar (Croft 2001, 2020 など) を理論的枠組みとして、現代日本語の文法研究に対して通言語的・言語類型論的基盤を取り入れることで得られる新たな視点を示すことを目的とするものである。具体的には、現代日本語における時間を表す複文（以下、時間節構文と呼ぶ）と、それに関連する構文として、裸名詞句構文（無助詞主題構文と助詞省略構文の総称）に関する議論を扱う。本稿では、以上の構文に関連する現象を例に、全部で3つの論点を扱うが、どの論点においても、これまで日本語学や国語学などの先行研究で蓄積されてきた知見を損ねることなく、かつ、先行研究による分析に残されていた問題点を自然に解消できるような分析が示される。

本稿は、第1章から第6章までの全6章で構成される。まず、第1章では、本稿の目的と構成を述べた上で、第3章から第5章で扱う3つの論点、すなわち、「構文の言語固有性」「構文間のネットワーク関係」「構文における意味と形式の対応関係」のそれぞれを整理して示す。具体的には、各章で扱う構文や現象に関して、先行研究による分析とその分析に残されている問題点、および、本稿による提案の要点を紹介する。

第2章では、Radical Construction Grammar の中心的な主張を説明し、第3章以降の議論のための理論的背景として導入する。具体的には、この文法理論が「言語の基本単位は構文である」という前提を徹底的に推し進める中で主張する「普遍的な構文やカテゴリは存在せず、特定の構文内に現れるカテゴリや特定の言語体系内に現れる構文は、その構文や言語に固有の単位である」こと、「構文はネットワークを成し、ネットワークにおける関係は、スキーマと事例の関係によるものである」こと、および、「構文内における統語的要素と意味的要素は、必ずしも類像的には対応しない」ことについて、Croft (2001, 2020) などで挙げられている例とともに説明する。

第3章から第5章は本稿の本論に当たる。まず、第3章では、日本語の無助詞主題構文を例に、構文の言語固有性に関する議論を行う。先行研究（山泉2013など）では、日本語の無助詞主題構文は、英語などに見られる左方転位構文（Left Dislocation construction）の代名詞的要素がゼロ形式で現れたものと分析するモデル（本稿では「左方転位モデル」と呼ぶ）が提案されている。第3章では、このモデルに残されている2つの問題点として、扱える例の範囲に限界がある点と、そもそも日本語の無助詞主題構文と英語の左方転位構文とでは、表す意味の範囲と形式の組み合わせ方が異なっている点を指摘する。その上で、これらの問題点を解決するためには、日本語の無助詞主題構文は日本語の文法体系に固有の構文であること、言い換えれば、英語の左方転位構文などの一見類似している構文であっても異なる単位として捉えなければならないことを述べる。

具体的には、日本語の無助詞主題構文に関して、以下のモデルを提案する。すなわち、日本語の無助詞主題構文の規定に代名詞的要素の存在は関わらず、かつ、無助詞主題構文が持つ主題設定の意味は、この構文が固有に持つ構文の意味であるというモデルである。その提案の下で、以下の3つの考察を行う。第一に、左方転位モデルで代名詞的要素の「有形化」と捉えられる操作に関して、実際には、主節内における代名詞的要素の有無によって異なる構文の意味が表されており、したがって両者は異なる構文を形成していると指摘する。第二に、英語の左方転位構文と日本語の無助詞主題構文を対照するには、意味地図モデルの採用が有用であることを示す。第三に、本稿の提案は、左方転位モデルの抱える問題点を解決するだけでなく、これまで国語学や日本語学で蓄積されてきた無助詞主題構文の意味記述とも矛盾せず、むしろ、それらの記述を十分説明できることを議論する。

第4章は、いわゆる日本語の「複文」の一つと位置付けられてきた無助詞時間節構文を例に、構文間の関係、特に、同一の形式が異なる意味を持つ場合の関係や、構文同士が形成するネットワーク関係に関する議論を行う。第4章では、まず、複文研究における関心が主に従属節と主節の意味的關係に基づく分類にあり、それらの意味と形式との対応という観点はそれほど注目されていないことを確認した上で、以下の2つの問題点を指摘する。すなわち、1点目

として、無助詞時間節（例えば「食事をするとき、テレビを消した方がいい。」の下線部）と形式は同じであるが異なる意味を表す構文（例えば「食事をするときが一番楽しい。」の下線部）との関係に関する議論があまり十分ではない点と、2点目として、無助詞時間節構文の記述や分析に関して、時間節が主節を連用修飾できる理由に関する議論が重視されていない点である。

以上の問題点に対して、本稿は、無助詞時間節構文は、無助詞主題構文に動機付けられた構文であるという分析を提案する。言い換えれば、無助詞時間節構文は、構文のネットワークにおいて、無助詞主題構文からの部分的指定を受けて存在しているという分析である。また、それと同時に、同じ「食事をするとき」という形式が主節事態を連用修飾すると（すなわち、無助詞時間節であると）解釈されるか、あるいは特定の時点を示すと（すなわち、連体修飾節を伴う名詞句であると）解釈されるかは、それが生起する構文全体を基に決まることを議論する。さらに、無助詞時間節構文が「時間状況設定」の意味を持つ理由は、無助詞主題構文が持つ「主題の設定」の意味から拡張されたものであることと、そのような意味拡張には、無助詞主題構文が持つ「語用論的関連付け」という構文的意味が貢献していることを示す。また、無助詞主題構文が持つとされる「発話行為的意味」が無助詞時間節構文には観察されないことなどから、無助詞主題構文と無助詞時間節構文は、互いに関係を持ちながらもそれぞれ個別の構文として存在していることを述べる。

第5章では、時間節構文の表す情報構造と、裸名詞句構文の形式的区別とを適切に扱うための議論を行う。これら2つの論点をめぐる先行研究では、それぞれに分析や事実の指摘が行われているものの、いずれの論点に関しても問題が残されていると言える。まず、時間節構文の情報構造に関する分析（益岡1997など）では、時間節における格助詞の有無と情報構造が対応を持つという一般化が示されているが、益岡自身が述べる通り、実際には、格助詞の有無と情報構造は、必ずしも対応しない場合がある。また、裸名詞句構文の形式的区別に関しては、各研究（加藤2003や丹羽2006）による記述がやや散発的であるという問題点を挙げる。

これらの問題を解決するために、本稿は、まず、郡（1992など）による文内イントネーションと情報構造の対応関係に関する主張を参照する。その上で、その対応を構文として捉えようとするならば、郡の主張は、統語的要素と意味的要素が非類像的に対応することを前提にしてはじめて適切に捉えられるものであると述べる。すなわち、本稿では、イントネーションのパターンと情報構造が構文を成すと考えられる場合、焦点を表す形式要素そのものではなく、その直後の要素にアクセントの弱化という形式的特徴がある構文と、前提を表す統語的要素も焦点を表す統語的要素もアクセントの維持という同様の形式的特徴を持つ構文という2種類の構文によって情報構造が表し分けられていると主張するわけである

その上で、本稿では、時間節構文における情報構造の表し分けも、裸名詞句構文における形式的区別も、郡の主張に基づく上記の2つの構文に動機付けられて実現していると主張する。具体的には、まず、時間節構文の情報構造の表し分けに関して、主節部分のアクセントが異なる「焦点化時間節構文」と「非焦点化時間節構文」という2つの構文を提案し、それによって、先行研究に残されていた問題が解決することを示す。その上で、本稿の提案する分析が妥当であるかどうかを、東京方言母語話者を対象に行った読み上げ調査の結果を基に議論する。また、この提案の下で、先行研究（定延2013、岩崎1998など）を基に、時間節が伴う格助詞の「に」や「で」が表す意味は、主節事態と時間状況の間の時間関係の明示であると述べる。

続いて、裸名詞句構文における形式的区別に関して、第3章で提案した「無助詞主題構文」にイントネーションの観点を加えて規定し直すとともに、新たに「名詞句焦点の助詞省略構文」と「全体焦点の助詞省略構文」と呼ぶ2つの構文を提案する。その上で、時間節構文に関する議論と同様に、本稿の提案が妥当であるかどうかを、発話調査の結果を基に検討する。また、本稿の提案によって、裸名詞句構文の形式的区別に関する先行研究の指摘は統一的な見地から説明が与えられることとなる。

第6章では、本稿で議論した上記の内容を整理するとともに、本稿の考察が日本語の文法研究に対して持ち得る意義および本稿の各章に残された課題を述べ、本稿を総括する。本稿の議論が持ち得る意義としては、日本語の文法研究に対して通言語的基盤を持ち込む利点が示せる点と、そのような通言語的基盤を求める研究として、「構文」という単位が有用であること、また、構文を基に行うそのような研究は、結局、国語学や日本語学で言われているような、文法研究を意味と形式の対応関係の考察として捉える考え方の遵守でもあることを述べる。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 松 浦 幸 祐 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	今井 忍
	副 査	准教授	山泉 実
	副 査	准教授	田村 幸誠
	副 査	教 授	岩井 康雄
	副 査	教 授	岸田 泰浩

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、現代日本語の時間を表す複文（本論文では「時間節構文」と呼ばれる）のうち従属節の末尾に格助詞が生起しない構文（「～とき、…」、「～あいだ、…」、「～あと、…」、など。本論文では「無助詞時間節構文」と呼ばれる）に関する研究である。この構文およびそれに関する諸構文を、Croft (2001)等で提唱された Radical Construction Grammar（本論文では「クロフトの構文文法」と呼ばれる）の枠組みで分析し、それらの間にどのような関係があるかを明らかにするとともに、これまで個別に記述されてきたこれらの構文の性質について、本論文で新たに見出された現象も加えて統一的な説明を与えようとする試みである。

論文全体の構成を示す第1章に続いて、第2章では、本論文の分析の理論的な枠組みであるクロフトの構文文法の概要が示される。クロフトの構文文法は、言語類型論に基盤を持つ射程の広い枠組みであり、これまでの言語学の通念を覆すような難解な側面を持つが、本論文では、本論に関する論点に限られるとは言え、極めて簡潔かつ明確に概要がまとめられている。

第3章では、無助詞名詞句が文の冒頭に現れる構文（「私、知ってます。」「このチャーハン、タケノコが入ってる。」など。本論文では「無助詞主題構文」と呼ばれる）について、これを英語など他の言語にも見られる左方転位構文の一種であるとする先行研究の主張を批判し、無助詞主題構文を日本語固有の構文として規定するとともにCroftの「意味地図」を適用することで、左方転位構文との関係をより適切に捉えられるとしている。

第4章では、第3章での考察を踏まえて、本論文の主題である無助詞時間節構文について分析が行われている。従来の時間節構文の分析が、連用節という大枠の中で、時間節構文がどのような意味・機能を果たすかを記述的に分析することに主眼が置かれており、そもそもなぜこの構文において従属節部分が主節部分を修飾する機能を持つのか、また、従属節部分が別の環境に置かれればいわゆる名詞節として機能することが可能であるという点をどのように説明するか、という、無助詞時間節構文の根源に関わる問題が問われないままになっていると指摘する。本論文では、Croft (2001)の構文ネットワークに加えて、Shibatani (2017)他における「文法的体言化」という概念を援用し、これらの2つの問題点に対して解決を与えることを試みる。すなわち、無助詞時間節構文における従属節部分は一つの文法的体言であり、それが表れる構文によって指示機能と修飾機能という異なる2つの機能を持つのは、体言の一般的特徴から帰結すると分析される。さらに、無助詞時間節構文を第3章で考察された無助詞主題構文の下位スキーマとして位置づけ、無助詞時間節構文の基本的な特徴は上位スキーマから継承されるものとされる。これにより、連体修飾構文、無助詞時間節構文、無助詞主題構文という、従来別個に分析されてきた構文をスキーマと事例のリンクによって関連づけ、それらの形式的・意味的特性は構文間のスキーマ-事例の関係から自然に生じるものと主張する。

第5章では、従来明確に区別されないことも多い無助詞主題構文と助詞省略構文について、談話機能上の違いと音声的な違いに基づいて分析が行われる。書記上は同一の形式を持つ文を異なる文脈で提示することで、そのアクセント句間の音調パターンがどのように変わるかを実験的に検証し、それが郡 (1992) 他が主張する文内イントネーションと情報構造の関係にほぼ一致することを示している。これを基にして、従来主張されてきた、格助詞の有無が焦点化の可否と対応するという説を退け、音声的な特徴として散発的に挙げられてきたポーズの有無や強勢の有無といった特徴も根拠がないと主張する。さらに、実験結果を基にアクセントの弱化がある「焦点化時間節構

文」とアクセントの弱化がない「非焦点化時間節構文」を設定し、それらの意味的側面として焦点位置を規定する。その際、Croft (2001)における構文の非類像性の主張が援用される。すなわち、焦点として機能する要素そのものが形式的な標示を持つわけではなく、焦点はあくまでも構文全体の特徴によって定まるという主張である。このようにして、時間節における焦点化の問題についても、クロフトの構文文法の優位性が主張される。最後の第6章では、本論文の結論と今後の課題が示される。

論文全体の記述は非常に簡潔で、論点も明確に提示されている。それぞれの章は有機的に関係づけられており、各箇所での関係が明示されているために、常に研究の全体像を念頭に置きながら各章の議論を追っていくことができる。これは、申請者が優れた表現力を持つというのみならず、理論的な枠組みや扱われている言語現象を深く理解していることを如実に示すものと言える。特に、第3章と第4章では、無助詞主題構文、無助詞時間節構文、連体修飾節という、従来関連づけて議論されることのなかった3つの構文について、クロフトの構文文法と体言化理論という2つの理論を巧みに組み合わせることによって、それらの関連性を根本から基礎づけることに成功しており、申請者の並々な分析力を感じさせる。また、第5章においては実験的な手法を用いているが、実験のデザインにやや難があるものの、データの扱いや分析は手堅く行われており、自説を確証するに足る十分な議論が提示されている。全体として、理論と記述のバランスが優れており、近年注目を集めているもののその難解な側面により日本語における分析が進んでいなかったRadical Construction Grammarを日本語の言語現象に本格的に適用した優れたケース・スタディとして貴重な研究と言える。

その一方で、先駆的な研究に特有のいくつかの難点も散見される。まず、記述的に扱われている範囲が狭いという点である。従来の研究では、時間節において格助詞の有無がどのような違いを持つかは多く議論されている。例えば、「間」と「間に」には明確な意味的な違いがあり、それらは「まで」と「までに」、「あと」と「あとで」などに規則的に見られる。本論文でもその点については触れられているものの、本論文の他の箇所における充実した議論に比べるとやや物足りない印象を受ける。また、文の情報構造に関しても、本論文の議論に関係する点しか扱われておらず、主題化構文など、談話情報の操作に関わる他の構文との関係や文の談話構造そのものについて申請者がどのような見方を採っているかは明らかにされていない。しかし、このような点を考慮したとしても、本論文が従来の日本語研究にはない新たな地平を開くと同時に、Radical Construction Grammarという理論の有用性を明確に示したという価値は失われるものではない。

以上の評価に基づき、本論文が博士（日本語・日本文化）を授与するに値する優れた研究であると判断し、審査委員の全員一致により合格と判定した。